

Title	F・J・フィシャー 第十七世紀初頭における倫敦の輸出貿易
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.2 (1952. 2) ,p.139(67)- 141(69)
JaLC DOI	10.14991/001.19520201-0067
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520201-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

れた資料の點から一概に満足すべきものとはいへないといふ。然らば第十四世紀の全體を通じて英吉利の毛織物輸出は實際に如何なる状況にあつたのか。

一三三九年の百年戰勃發は、英吉利羊毛工業にとつても劃期的な事件であつた。これを契機としてフランドルからの輸入は杜絶し、軍需の増加と相俟つて、爾來英吉利においては自給の必要から羊毛工業の育成が眞剣に考へられるやうになつたのである。かかる努力は大方成功した。即ち英吉利は、大半の生産設備を戰災によつて喪ひ失職したフランドル諸都市の織物職工をも多數吸収して、内需を急速に充足し得たばかりでなかつた。英吉利は長い外國依存の時期を脱して製品輸出國へ急轉した。そして黒死病流行直前の一三四六年には、三三%の高率關稅にも拘はらず、戰亂の小康状態に乘じ、三千二百二クロース(但し一クロースは六碼半乃至六碼四分の一、幅の長さ二十六碼)を逆にフランドルに輸出するといふ顯著な躍進を示したのであつた。

黒死病流行の一三四七年以來、然し事情は一變した。生産者層人口が蒙つた相當な打撃のために、英吉利羊毛工業はその規模の縮少を餘儀なくされた。これに都市消費者人口の激減に依る國內市場の崩壊が加はつて英吉利羊毛工業の不振は一層促された。又主要販路ガスコニー(佛國西南部の往時の一州)の戰場化と共に、その年間葡萄酒輸出能力が第十四世紀初頭の九萬

噸から六千噸へ急落したことに依つて、輸入葡萄酒の對價に専ら毛織物を輸出する英人業者の發展への意欲が殺がれたことはいふまでもない。事實、毎年の毛織物輸出はこの時期には二千クロース精々であつたけれども、七百クロース以下といふ意外な數字を示す年度すら見られたのである。

然し一三三三年には國內の安定と主要販路ガスコニーにおける平和の回復とに依つて、英吉利羊毛工業は一時に繁榮を取戻した。そして毛織物に對する關稅が二%に引下げられたことも手傳つて、毛織物輸出は一三五三年來年々一八%の上昇率を以て増加し、一三六六年には一萬六千クロースを輸出し得る程の躍進であつた。従つてガスコニーへの毛織物の主要積出港ブリストルの擡頭はこの間において特に目覺しく、全國輸出毛織物の大半を扱つたこの港市にあつて織物商ロバート・チェッダアが築いた富は斷然他を壓倒してゐたけれども、國內諸階級の致富にも亦相當に見るべきものがあつた。

一三六三年に戰亂は再開された。英吉利毛織物の主要市場ガスコニーは再び荒らされて、このためガスコニーの葡萄酒輸出能力は未曾有の減退を示し、一三七一年までに六千噸を下廻り、英人業者はブリストルからの毛織物の積出を躊躇しなければならぬ程であつた。従つてこの時期には毛織物輸出が急速に減少し、一三六〇年の五千クロースから一三七一年には僅か千四百二十二クロースといふ驚くべき下落を見たが、この恢復は

容易に望むべくもなかつた。

一三七七年に至つて事態も餘程好轉した。戰亂の一時的停止に依る主要販路ガスコニーの經濟立直りがその重要な呼び水となつた。かくして一三八〇年以降毛織物輸出は年々八%の上昇を示し、一三九〇年には四萬クロースといふ大きな數字となつた。

英吉利の毛織物輸出が絶頂に達したこの時期においては、ガスコニーのほか、葡萄牙や西班牙が市場として重大となつたばかりでない。港都ハルを中心し英人業者は遠く北海やバルト海の沿岸にまでも進出し、一三九一年にはダンチヒに根據を置いて北邊にその猛威を振つた。又これと前後してフランドル織物工業の衰退に乗じて低陸市場を席卷し、ハンザ商人の肝膽を寒からしめたのであつた。(渡邊 國廣)

F. J. Fisher

『第十七世紀初頭における倫敦の輸出貿易』

(F. J. Fisher, "London's Export Trade in the Early Seventeenth Century." Economic History Review, Second Series, Vol. 3, No. 2, 1950. pp. 151-161.)

論文紹介

倫敦の輸出貿易は、第十七世紀の最初の四十年間において如何なる趨勢にあつたか。これは斷片的な統計に依存する以外になく、従つて正確は期し難いが、英吉利總輸出の約七割を當時この首府が占めてゐた以上、倫敦の輸出貿易に関する細やかなこの研究に依つて、第十七世紀初頭四十年間の英吉利の輸出貿易の大體の傾向を把握することが出来る。

倫敦からの輸出品は、如何なる場合にも毛織物が首位を占めた。輸出貿易が全般に顯著な上昇を示してゐた第十七世紀の最初の十五年間を経過した次の二十五年間において、北歐・中歐及び東歐向けの厚毛の毛織物の輸出は急激に減少して、第十六世紀の状態に逆行してゐるけれども、主として南歐向けの薄手の毛織物の輸出は却つて増加し、一六〇〇年以後の僅々四十年間に、額にして僅に五倍といふ異常な躍進を遂げ、倫敦の輸出貿易において西班牙・亞弗利加及びレバントの諸港が占める地位は漸やくにして高まり、マーチャント・アドヴェンチュアラーズ組合の衰退に引替へて、レバント會社は優勢に向ひ、中東貿易を直接に擔當したこの會社の意外な發表には誰も均しく驚歎し、なかには、「將來性ある最も儲かる會社」であるとして敢て喧傳する人もあつた。

倫敦の輸出貿易における趨勢のかかる急變を、然らば如何に説明するか。一六一五年以降において厚毛の毛織物の輸出が減少し、代つて薄手の毛織物の輸出が増加したのは、何故であつ

たらう。この理由の本質的なものは然し英吉利毛織物工業の性格を吟味することに依つてのみ理解することが出来るのであるまいか。

然らば英吉利毛織物工業は、實際に如何なる状態にあつたか。その顯著な特徴は果して何か。緩慢な進歩はあつても、刮目すべき技術的發明乃至改良は當時の英吉利毛織物工業にはなかつた。加ふるに原料の獲得を規制した複雑な諸約定が厄介な事態を惹起することも屢々であつた。國家財政は毛織製品に對する課税の免除を簡單に容認することが出来る程裕福ではなかつた。又労働者の生活状態も當時において既に由々しい社會問題となつてゐた。従つてかかる事情の下においては、生産費の引下を策する業者の執拗な努力にも拘はらず、毛織物價格の尙一層の切下は殆んど不可能であつたといつてよく、生産は一般に絶対に引下の餘地のない費用の下で行なはれてゐたのが特色であつた。一部の不埒な業者は粗製濫造に依つて不可能な經費の切下に對處し、以て巨富を積もうとしたが、一般の器々たる非難に遭ひ、當局も亦嚴重な態度でこれに臨み、面倒な規則で拘束したために、生産費の一層の引下は至難な、そして非實際的な策謀と化したのであつた。「英吉利の織物は廉く、その良さと相俟つて、相當な賣口を持つてゐた」。然しこれ以上の切下は右に述べた事情から到底出來さうもない相談であつた。

故に第十七世紀の倫敦商人にとつて、價格の引下に依る販路の回復乃至開拓は殆んど不可能であつたといはざるを得ない。歐羅巴における厚手の毛織物市場が三十年戦争の痛手を受けて殆んど壊滅し去つてしまつた時、厚手の毛織物の生産費の一層の切下に依る需要回復の不可能なことを熟知してゐた利に聰い倫敦商人は、貧弱な在來の設備に縋り辛うじて新たに生産し得た薄手の毛織物を以て、一六〇四年の和陸以來漸やく友好の回復した西班牙・亞弗利加及びレバントの新市場に臨んだのであつた。かくして第十七世紀の十五年代以降において、南歐の各港市が倫敦の輸出貿易に重大な地歩を占めるに至つたわけである。然し東洋における新市場に適當した商品の製造のためには英吉利の織物技術は餘りにも幼稚であつた。このため、西班牙人の自國植民地への再輸出に依る流入を除けば、英吉利毛織製品は未だ東洋市場には見られず、亞米利加大陸も亦販路として成熟した段階になく、従つてこの兩市場が問題となるには時期を待たねばならなかつた。

倫敦の輸出貿易において、再輸出は毛織物に次ぐ大きな利益の源泉であつた。一六四〇年に倫敦商人は東印度の産物を露西亞・ネーデルランド・獨逸・伊太利及びレバントに向けて再輸出してゐる。同じ年にヴァージニアの煙草がハンブルグへ、地中海沿岸の産物がネーデルランドへ、歐羅巴の他の諸國の工業製品が亞弗利加及び亞米利加へ再輸出されてゐるが、これ等の合

計は、毛織物を除く自國産物の輸出總額と一致した。西班牙やレバントに對するニューファウンドランドの魚類、露西亞の皮革・蜜蠟及び毛皮、バルト沿海の穀物・木材及び大麻、獨逸及びネーデルランドの種々な産物の再輸出と共に、上述の旺盛な活躍が仲業業者としての倫敦商人の名譽を高からしめたことは疑ひを容れないところである。(渡邊 國廣)

H・R・C・ライト

『第十九世紀初年東洋における英・蘭の抗争』

Ch. R. C. Wright, "The Anglo-Dutch Dispute in the East, 1814-1824." Economic History Review. Second Series, Vol. 3, No. 2, 1950. pp. 229-239.

ナポレオンの大陸封鎖を尻目に、國內における産業革命の急速な進展から、英吉利東印度會社は有望な新市場を東印度諸島に求めて進出し、原住民消費物資を輸出した。和蘭東印度會社は既得權益擁護のため英人業者のかかる企圖に反對であつたが、自己勢力の扶植に熱意を缺く會社幹部の消極的態度は、保守的な印度人と比較すれば餘程寛容なインドネシア人の外國産商品に對する消費癖と相俟つて、英吉利東印度會社のこの方面

への進出を益々旺盛なものたらしめた。

英人業者の東印度諸島計略は、實は第十八世紀末に至り始めて本格化した。七〇年代にあつては然し香料密輸が主であつた。一七八四年に英吉利は東印度海域を航行する自由な權利を獲得し、一七八八年から一七九五年までの殆んど十年間にペナンやマラッカを相次いで奪ひ、この兩港を中心として東印度諸島の北邊を大體その勢力範圍に收めて以來、第十九世紀に入つて新嘉坡を攻め、この地において迅速に發達した世界貿易は、和蘭の東印度貿易を壓倒するに至つた。

今や新嘉坡がバタヴィアに代り東洋の中心市場となつた。そして種々な商品がこの世界市場において集散された。英人業者はここでは火薬・阿片・鐵砲・陶器・双物・金物のほか綿・絹・毛製品の賣手となり、香料・錫及び砂金の買手であつた。尙又支那航路の英吉利船に依つて、菓燕・海鼠・白檀・檳榔烏・鼈甲・蜜蠟及び眞珠が齎らされ、新嘉坡を中心に英吉利の東印度諸島貿易は急激に繁榮したのであつた。

東印度諸島における英吉利の優位は然し綿製品の輸出に起因した。英吉利商人も亦仲介業者の排除・輸入關稅の引下等を畫策し、輸出振興に懸命であつて、このため價格は下落し、需要が一時に増加した。そして一八二三年にはジャバに三十萬磅が輸出されたが、これは東洋に輸出された英吉利綿製品全額の大凡三分の一に當つてゐた。